

会の曲目リハサルや具体的打合せなどをし夕食を共にして八時閉会。

中山鳳水 九月三日(日)午後一時大演奏大会 阪天神筋の朝陽会館で中山鳳水会主催、鳳水後援会、一水会大阪支部、大阪琵琶同好会後援のもとに華々しく開演。満員の盛況を呈した。木村重成、東京谷暉水、本能寺、中山鳳水、羽衣、鳳水、霧の川中島、正幸、重衡、政峯、母常盤、鳳水、井伊大老、養老駿水、屋島の誓、宮之原聖水、花の白虎隊、辻旭城、矢野旭信、絃石橋旭嶺、静、松岡玲水、決戦川中島、近藤登水、父乃木將軍(上)、橋口薩水、阿(下)、杭東詠水、新曲姫百合の塔、石橋旭嶺、橋狭間、谷津水、豊川舞身隊、丹野鮎水、白虎隊、藤原英水、竜の口、辻有水、小栗栖、奥村慧水、伊豆の御難、小川吟水

晴風会 九月十六日(土)午後六時一演奏会 九時東京杉並区高円寺会館に於て開催盛況であった。月下の陣、矢野美紀子、送別、武内青寿、俊寛、森田青芳、菅公、本橋錦風、乃木將軍、坂入晴峰、羅生門、大関英子、壽陽江、青木晴城、川中島、加藤錦陽、修善寺物語、杉山雅後、別れの盃、山崎典水、竜の口、山下晴楓、城山の月、浅野晴風、外に詩吟六題

錦心流 琵琶 九月十七日(日)午後六時一演奏会 一時大阪天神筋朝陽会館、主催小川吟水氏、後援憲水会。名称通り新進気鋭の熱演続きて盛況であった。金剛石、吟水会員連吟、城山、金寄吟呂、井伊大老、小西雨水、常陸丸、植田豊水、義仲の最期、小川吟水、良寛、菊地庸子、母常盤、吉山蓮紅に詩吟六題

藤巻旭鴻演奏会 九月三十日(土)十一時一十九時東京都千代田区大手町大和証券ホール(入場料五〇〇円) 京都琵琶協会十月定期茶話会 十月七日(土)午後一時神戸市住田区花隈町一六兵庫東遺族会館(電話35351)西京市兵庫区花隈町下車山手直ぐ(連絡先神戸市兵庫区雪御所町一九安住旭康女史 電話0752110330番) 日本琵琶振興会十月例会 十月二十二日(日)正午東京渋谷区千駄ヶ谷鳩森八幡宮宴会場、会費五百円(茶菓軽食代)

山崎蓮枝、吉野落、山本嶺舟、大和懷古、崎司陽、会津白虎隊、松岡玲水、重衡、松原粗水、屋島懐古、千藤吟泉、反町紫水、新撰組、森中志水、紅葉狩、木村蓮水、竜の口、中山鳳水、掛合羽衣、小川吟水、江原錦和、彰義隊、平井春嶺、湖水乗切、東憲水、外に詩吟六題

故水也田香洲師を偲ぶ 九月十七日(日)琵琶演奏会 午後一時京都安井金比羅宮会館、水也田会主催。往時の名人を偲び満員に近い聴衆を迎えて盛況を呈した。堅田落、戸倉旭嶺、安田旭富、絃旭登、那智の荒行、大西旭明、藤島詣、大野政月、由井が浜、若宮旭登、安宅の関、谷村旭泉、高松城、田中鶴水、若き敦盛、田野旭兎、絃旭登、級流島、矢吹華水、陣中の夢(録音)、故水也田香洲、橋中佐、榎本旭風、松岡幸蔵、美登里進水、姫百合の塔、松岡旭岡、西郷隆盛、伊吹正陽、扇舞太田道隆、故香洲夫人水也田桜水、吟若宮桂水

昭和四十七年十月一日発行(非売品) 編集者 植村真水 発行所 高槻市玉川二丁目 電話 0726 三三〇四〇三番 七二八〇三番

暑かった夏も残り二百十日、二百二十日の厄日も無事にすんで漸く爽やかな秋の好季を迎えた。今年も残暑は殊の外厳しく九月に入っても毎日三十二、三度の高温が続く、いつになつたら秋が来るのかと夏に弱い編集子は一日千秋の思ひであつた。さあこれから我が世の秋である、大いに張切って琵琶を弾きしもう。九月十日の京都琵琶協会演奏会を聴きに來られた某ファンから「琵琶は聴くものでなく味わうものである。演者は字句や節調に捕われずに歌中の人となり切つてやうに弾いて欲しい」との演奏は空に浮いてしまつて聴いていても熱が入らぬ」との事後感を寄せられた。この金言篤と肝に銘ずべきであらう。

琵琶 機関紙 京 絃

第二二〇号 京 絃 社

新平家物語

上皇と麻鳥

水原五郎 作詞

思い立ちぬる旅衣 思い立ちぬる旅の歌 都を出で、幾春秋 墨染袷せし旅姿 讃岐の国は松山の 鼓ヶ岡を打越えて 西行法師はよろしうに こゝ白降につきにけり いとも寂しき山合いに 静かに眠りに在します 崇徳の院の陵に しばし袖をぞ濡らしける よしや君 むかしの玉の床とても 何にかはせむ

らせがござりましよう、いかにうつつの世とは申せ、今の帝はお上には、御血筋に当る御弟君、ましてや関白忠通公を始めとして、御恩を受けし人々も、お上の御帰京願い上ぐれば、たゞこの上は御気色和らげ、ひとえに五部大乗經の御写経を、切なるすゝめに御心を動かせけるか崇徳の院朝な夕な御写経今宵も静かに経文に 御心深く懸けさす時木の間を洩る、笛の調べ「こは誰人の笛なるか」絶へて久しき楽の音に佐の局もうれしさに心も急きて足早に 忍びて軒をぞ立ち出で、思いをこめし事明し 情にすがれば番士らも「笛人とく」と招き入る「汝は何処の何人ぞ」問われて笛人こわごわに

御傷ましや崇徳院 かつては万乗一天の 君と仰がれ尊ばれ 清涼殿や紫宸の間 百官御相袖つらね 後宮後坊の台には 三千の美翠の釵か 色あざやかに並びそい 歌管絃に舞いあそび 君のまなざし誘いける 昔の日々は夢なるか 今丸木の御所といふ 四方を池に閉ざされし 配所の君となり給り 訪ねる人は絶えてす 今一度の都へと 願ひし文もかきもなく 消えてはかなき秋の露 お側近く仕へつる 佐の局はひたすらに (詞)お上には如何遊ばされました、未だ都より便りは参らずとも、何れ必ず良い知

今日まで迎る旅の空、(詞)私は伶人の家に生れましたが、故あって新院にお仕へいたし、長年都の柳の御所の水守を、つとめました麻鳥にござります、お局さま御見忘れ遊ばしましたか 「さてはそなたが麻鳥どの」折しも夜半の月さへて池を清らかに照しつゝ、庭面の縁に出で給ふ院のみ姿うつすなり 今は涙に咽びつゝ、言葉も出でず麻鳥は 笛とり出し吹き出づる調べは四方に牙へわり千草にすたく虫の音もいつしか止みて聞ゆるは咽びなき入る声ばかり 「あゝうとまじや人の世は保元の戦さ束の間昔の夢となり果てしか」 今は甲う人もなき 讃岐の院の陵は 白峰谷の山合いに 寂寥として眠るなり 墨染ぬらし西行は たそがれせまる白峰の小道を孤影さむざむと下りて迎る歌の道。(四七・五・一)

川中島合戦址(中)

信濃路の觀光地 辻 旭城

信玄の出陣 海津城の守将高坂昌信は、謙信出馬の情報に接するや直ちに狼煙山(のろしやま)に於て狼煙をあげ、葛尾山、和田峠等を経て急を甲州に報ずる一方、城の防備を厳重にして信玄の出陣を待った。

狼煙山は一名高せき山と云い、海津城の東南に高くそびえるピラミッド形の山。甲越信戦記録を繙いてみると「高坂正が工夫にて狼煙山を見立て甲州迄のつなきの烽火を定む。是越後より謙信不意に出馬ある時、甲州に告ぐる為の烽火也。葛尾山、和田峠、腰越山、金沢、若神子(わかみこ)、それより躰瀧ヶ崎の嶺迄暫時に知らるる工夫也。常に二十人宛山を守らしむと云う。海津城より甲州迄の道程三十七里。」とある。

謙信の出兵を予期していた信玄、海津城からの急報により謙信を討滅すはこのときと直ちに陣の命を下し、一方小田原の北条氏康に援軍を乞う等周到な用意のもとに、八月十八日兵約一万を率いて甲府を出発し、二十日大門峠を越えて長久保古町に到着、南進の兵三千を合せ二十二日には早くも上田に宿営、北進の將兵三千、西上州小幡の約三千、更に小田原からの援軍三百も来り、その勢力約一万八千、信玄の行動は正に「疾きこと風の如し」であった。そして上田に在って計画をたて川中島に出て、二十三日まづ石川の茶臼山に登り、越軍の情勢を観ると同時に妻女山と旭山城との連絡を絶つ策に出た。

翌二十四日未明山を降つて川中島を横断し、西宮渡、横田を中心にして南は犬ヶ瀬、北は猫ヶ瀬まで延長約一里の陣を敷いたため、妻女山の越軍は完全に糧道を絶たれ、またその退路を失った。

兩軍の動き

このよりの情勢五日、越軍は正に糧食が尽きるより外ない死地に陥つたわけであるが、主將謙信はそれを知らぬが如く、時には山上を漫步して川中島の風景を眺めたり、又は古詩を口吟さみ得意の琵琶を弾じ、或は自ら小鼓を打って近習に謡わせるなど悠々閑々、呑気な態度に出たので、全軍の士氣も大いに振るつたのである。

信玄は千曲川を隔て、謙信と対陣し越軍の動勢をさぐっていたが、敵は悠々しかも陣地の警戒極めて厳重。前面には千曲川の障害がある。無謀な攻撃に出ることも出来ず対陣五日、八月二十九日午後八時遂に陣地を撤退して全軍海津城に引揚げた。優位な態勢にあった信玄が撤陣した理由は、謙信の海津城攻撃を懸念したこともあろうが、また敵の鋭気を避けてその情気を撃つという兵法の原則に従って、まづ敵の退路を明け、謙信の帰途に乘じようとの計略ではなかつたか。

暫くして妻女山と海津城で空しく対峙すること十日、九月九日重陽の節句を迎えた。海津城では諸將が本丸に集つて祝典を行つた後、信玄は主將部將を集めて軍事会議を開き、飯富兵部、馬場民部、高坂正、山本勘助等の意見を容れて、戦を仕掛ける策を定めた。即ち妻女山の謙信陣は依然として動かないので、軍を二隊に分け、一軍を以て西条から大嵐山の後ろを通り、森の平を越えて妻女山の敵を背後から攻撃すれば、敵は勝敗の如何に拘ら

ず必ず山を降り千曲川を越えて川中島に出るに違いない。その時他の一軍を川中島に配して、前後から之を挟み討にする作戦をとった。これを信玄啄木の戦法と云う。それはキツンキ鳥が木の穴の中の虫を捕える時、穴の口とは反対側をコッコツツといはむと、虫は驚いて穴から出てくるのでそれを喰うことから名付けられたものである。

そして九日夜、月の没するのを待つて高坂昌信を先頭に飯富、馬場、真田、小山田、甘利、相木、小幡等の十將、兵一万二千の迂廻軍が先づ行動を起した。他の旗本組突撃隊は山原昌景先鋒となつて武田信繁、穴山、内藤、両角、望月、太郎義信、原、道達等十二將これに続き、総勢八千を以て十日未明海津城を出発し、広瀬で千曲川を渡つて八幡原一帯に布陣、越軍挾撃の態勢を整えた。

一方妻女山の謙信は、海津城から著しく立上る炊煙に気付き、敵が行動を起すことを感じとり、斥候の情報から信玄の策を窺破してその裏をかいだ。謙信は山上陣地の烽火を前夜のように焚き、紙の旗を夜空に翻えして夜営の夢を結んでいる如く装い、直ちに全軍出発して深夜人馬声なく、頼山陽の詩の如く「鞭声聒々」の雨宮渡で千曲川を渡つて川中島に進出し、戦陣隊形をとった。

信玄が海津城を出て川中島に移動した丁度同じ時刻に、謙信も川中島に出ていた訳である。この日の越軍の陣立ては柿崎景家先陣を

承り、主將謙信は竜字の旗を陣頭に押立てて第二陣に控え、本庄、長尾、色部、山吉、安田、中条、村上義清等の諸將がその左右及び後備となり、甘粕景持は一千の手兵をもつて遙か後方に在って甲軍迂廻勢の押さへをした。謙信の作戦は夜明けと共に敵の本營を奇襲し、合戦酣となる潮合いを見て、旗本を以て敵の本陣を粉碎せんとするにあつた。

狂醉亭漫録(第七十七)

平宗清随想

古谷 竟水

去る九月十日、京都府立文化芸術会館に於て開催された京都琵琶協会主催の演奏会で、私は拙い乍らも五十余年間歌い馴れた常盤御前の一曲を演奏したが、此の曲中に出る平宗清に就ては従来余り知られて居ないので、今回之の件を少々考えて見たいと思ふ。

此曲中の眼目である常盤と宗清の出遇いの件は、史上有名な事である苦難の不思議な事には、平家物語にも源平盛衰記にも、又最も脚色に富む義経記は常盤都落を叙し乍らも此の件には触れて居ない。とすれば常盤宗清の事は単に俗説に過ぎないのであろうか。

一般史書によると、平宗清は平家の武士左衛門尉季宗の子で通称弥平左衛門又は弥平兵衛と称し、清盛の弟平頼盛の臣で、頼盛が平

治の乱の功により尾張守に任官の際その目代を勤める。永暦元年(一一六〇)逃走中の頼朝を捕えて清盛に差出す。清盛は頼朝を宗清の家に禁錮するが、当然死罪と予想して宗清は助命運動を起す。即ち頼朝が保元以来滅びし源家一族の冥福を祈り僧籍に入るを条件に、頼盛の母池の禪尼に取成しを依頼する。

禪尼はその志を憐れみ百万清盛を説得し、遂に頼朝は死罪を免れる。爾来頼朝は宗清を深く徳とし、後年平家追討の際、宗清のみは害すべからずと内命する。寿永二年(一一八三)平家都落後宗清は頼盛と共に都にあり、頼朝之を知つて兩人を鎌倉に呼ばんとするが宗清は頼盛のみを鎌倉に送り、自らは固辞して屋島に赴き宗盛に仕へ、同四年壇之浦に於て平氏と共に滅びたか、否かは定かでない。

宗清の身分は検非違使の小身で、現今の部長刑事程度に過ぎないが血も涙もある立派な武士で其人柄から後世人の心を打つたものと思われる。芸界でも大きく取上げている。

文案や歌舞伎の二谷二葉軍記はその尤なるもので、宝暦元年(一七五一)十二月大阪豊竹座初演で、並木宗輔、浅田一鳥、浪岡鯨児、並木正三の合作で、一の谷合戦に於ける頼谷、教盛、忠度等の物語を主にした五幕物であるが、特に頼谷陣屋の場は現在まで靡々上演され、歌舞伎では代表狂言の一つである。私は杜年の頃、この頼谷陣屋を、先代雁治郎の熊谷、先代梅幸の其女房、先代羽左衛門の義経、先代中車の弥陀六という豪華配役で見

たが、特に中車の弥陀六は老境の宗清の心情を活写した名舞台で、今も尚、ありありと覚えてゐる。

この場の概略は、頼谷は須磨浦で平家の公達教盛を組織した時、出発の際堀川御所に於て主君義経から諭された事、即ち須磨の若木をいたわるより、一枝を切らば一指を切るべし、との制札を渡され、幼時平家に助けられた義経が、今度の合戦にも敵方の蕾の花を散らすな、との謎を思い浮べ、丁度同年の伴小次郎を身替りにその首を打ち、教盛の命を助けるのであるが、陣屋の場では、御影の里の石屋弥陀六の宅へ教盛の亡霊が現われ、愛用の青葉の笛を渡して石塔を誂えたとの噂が、源氏方に聞え、弥陀六は陣屋へ引立てられ、偶然義経に見付かる。

義経は一見して恩人宗清の老後の姿と悟り懐かしがるが弥陀六は一応空惚ける。義経はわれ三歳の其時母常盤に抱かれて伏見の里に落ち行きし時、汝の情けに救われし大恩は今以て忘れは致さぬ。見覚えのある眉間のほくろ、と詰寄られ、進退谷まつて弥陀六は、恐れ入つたると眼力、と平伏し引抜きで宗清の昔に返り、物語に入るのであるが、義経は昔の恩を感謝し宗清の健在を喜ぶ。此時引出物として鏡櫃を賜るが、その中味は確かに生存している教盛の身柄であつたのだ。

此の辺には無理な脚色があり、馬鹿馬鹿しいようでもあるが、芝居の観客は其れと知り乍らも真情に打たれ落涙する人も多い。

常盤と宗清が伏見で邂逅の物語がある以上此の程度は結末譚はあつて然る可きで、この芝居は究所を衝いた名作と謂えよう。

なお此の芝居の終りの方に平忠度が出る。即ち平家没落後西国歌修行に出た忠度は、許婚者菊の前の乳母りんの家に一夜の宿を求めた際、梶原平次の追手が掛かり、大力無双の忠度は大奮闘で抵抗するが、此時義経の部将岡部六弥太が主命により、忠度の「ささなみや...」の歌が勅選集の選に入つた由を伝えると、忠度は喜んで深く捕われる場がある。忠度の性格をよく現わしたものである。

次に常磐津に宗清の一曲がある。之は正確には恋愛ひよめの関守と称する舞踊劇で、初演は文政十一年(一八二八)十一月江戸市村座顔見世狂言、作者奈河本助、作曲岸沢式佐、配役坂東三津五郎の宗清、岩井条三郎の常盤で、之は近松門左衛門作源氏烏帽子折といひ芝居の第二段宗清館の翻案との説である。

内容は雪に悩んだ常盤母子が宗清の家に迎り付いた折、宗清は小松内府重盛の「松を手折って松を助く」との教訓の意味を汲み、美貌の常盤を好色漢清盛の二号か三号かに推挙すべく「操を捨てて操を立てる」という変な理屈を付けて、常盤を口説き落とすという筋の芝居である。然し常磐津畑の日本舞踊の演目としては、現在も盛んに演じられている。

師の便り

木村 維水

二十才前後の若い頃教えを受けた恩師が、五十年を経た今日郷里で尚御元気に余生を楽んで居られる事は、ほんとうに嬉しい事です。その恩師有阪秋水先生から御便りを頂き、先生御在京当時の想出でなどに接し懐かしさの余り左に断片的に御披露いたします。私ごとで誠に申訳ありませんが御許し下さい。

前略・私も本年八十二才になりました、年齢には勝てず時たまあちこちと故障が起りますが、現在のところ先は無事まかりありますから御休心下さい。

四年あと家内に先立たれ、子供もなく独りポッチです。しかし近き周囲には甥や姪が沢山居て皆相当の生活をしており、私もどうやら預金の利息で生活するだけの余裕もありますので、何の心配もなく暮らして居る次第です。いづれの日か当地へ御訪ね下さるとか、是非是非御夫妻にてお越し下さい。家財道具も一応はととのつて居りますから、宿は私宅にて致します。

つたからです。さてこんどは琵琶に付て思い出話を二三いたしましょう。私がラヂオやテレビに出演しないのは、若い頃の美声量もおとろえ、有阪秋水の名声を落したくなかつたからです。精神一到何事かならざらんといふ諺が有りますが、之は歌唄には適用出来ません。歌唄は一声二節と申して、万人にすぐれた美声の持主が十年以上其道に一生懸命勉強して、初めて一流の名人になれるのです。又自他共に許す名人になつても、声の調子が悪くなれば思うように表現する事が出来なくなり、私のように宝の持ち腐れになってしまいます。

私が京都で会心の演奏をしたのを覚えて居るのは、先斗町歌舞練場での「毒饅頭」、五条俱樂部での「本能寺」、六角会館での「川中島」などで、あとは記憶して居りません。丸山巴水君は私が東京芝桜川町の錦心先生宅にて代稽古をしておりました時に京都から修業に来られ、京都に帰られて稽古の出来るように、錦心流琵琶歌の全部に私が節づけして差上げたのです。当時私は十九才か二十才の事だつたと思います。まだまだお話ししたい事は沢山有りますが、とても書ききれませんから、いづれの時か又申し上げる事にしましょう。後略

仁志葵帖

水藤 錦襪

NHKから電話あり、お宅のお子さんだから何でも出来るでしょう、修善寺物語「桂」をとの事、私は心をしずめて「当人に御返事させます。」と云つた。翌日又電話があり伴が出てお受けした。六時間ほど教えた。この歌を得意とする藤波桜華の録音をかけて二人で四回聴く。稽古中むづかしさに二度程目をうるませていた。泣きたいのをこらえている伴の様子だった。

その日白緋の着物で出掛けた。お隣りの仲よしの東大生をお供に...帰ってきた伴にどうだったかと聞くと「声は出た、五本でやつた。」という。このお知らせ二百人へ出す。放送の当日又遠方へ電話した。数十軒かけた。疲れてぐったりした耳にNHKの新人演奏会が流れた。この数時間前に文化庁から十一月の私のリサイタルを「芸術祭参加を認める」との知らせがあり、明かるといひ持て聴いた。心の中で合掌して！

数ヶ所小さいミスはあつたが兎に角無事終る。「良く出来ました、お目出とう。」と伴に座を改めて挨拶。伴は返事に困り何とも云

わなかつたが、ニコニコ顔で私に笑いかけた。お祝の電話村木桜柳外十数人の方々...。松田静水先生からは「よく出来たね、録音したよ。」水藤枝水は「絃はおふくろに負けな心」村木桜柳は「先生、もう引退してもいいよ。」など、夜まで各地からのお電話が続いた。虫の声に交り母子の笑い声が響いて嬉しい育でした。

平家物語クイズ

平家ブームでやかましい昨今、京都琵琶協会でも去る九月十日「琵琶で聴く平家物語」と銘打って開催した演奏会が、別掲の通り大変な人気で好評を受けた。

過日京都四条通りの某銀行一階ホールで平家物語ゆかりの写真展が開かれ、筆者も見に行つて大いに参考になったが、会場で手渡された「平家物語クイズ」の印刷物の内面白いもの二、三を拾つてみた。琵琶人の中には平常気にもとめず漫然と弾奏して、このクイズを読んで「あゝそうか」と思ひを新たにする人もあろう。秋の夜長のつれづれにあな

- ① 祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり
- ② 平家物語ははじまる、「祇園精舎」とは
- ③ 平家の氏寺 ④ 僧兵の宿舎 ⑤ 印度にあつた寺
- ⑥ 平清盛は忠盛の長男となつて居るが一説には天皇の御落いんと云われる。その天皇は
- ⑦ 白河天皇 ⑧ 後白河天皇 ⑨ 後鳥羽天皇
- ⑩ その天皇が「朕の意の如くならぬもの」として挙げたもの三つ。さいころの目、鴨

47年度 芸術祭参加

錦びわ 水藤 錦襪 リサイタル

—— 琵琶道50年にちなんで ——

とき 昭和47年11月10日(金) 6時半より
ところ 東京大手町 日経ホール
入場料 (A) 1,500円 (B) 1,000円

① 曲垣平九郎 水藤 錦襪 ② 耳なし芳一 水藤 錦襪

③ しぐれ曾我 水藤 錦襪 ④ 屋島懐古

(尺八)堀井小二郎 水藤 錦襪
新津戸国重 部谷室歌 桜桜清美 水佳山美

後援 日本琵琶楽協会

川の水、そして今一つは

- ④ 女房 ⑤ 泣く子 ⑥ 僧兵
- ⑦ 清盛をめぐる女性達の中に祇王、祇女、仏御前などの白拍子がある。白拍子とは
- ⑧ しろうとの舞女 ⑨ 現在の芸妓 ⑩ 今様を舞う女芸人
- ⑪ 峰の嵐か松風か、訪ねる人の琴の音か
- ⑫ 知られる高倉天皇の愛人は
- ⑬ 小督 ⑭ 祇園女御 ⑮ 横笛
- ⑯ 清盛が新都を造ろうとして「福原」に居を構えたが、その「福原」とは
- ⑰ 神戸市 ⑱ 尼ヶ崎市 ⑲ 明石市
- ⑳ 平氏は航海の神に信心を寄せ特に或神社を崇敬した。平家納経で有名なその神社は
- ㉑ 金比羅宮 ㉒ 厳島神社 ㉓ 赤間宮
- ㉔ 平家打倒ののろしをあげた老將源頼政は若い頃「ぬえ退治」で名をあげた。ぬえとは
- ㉕ 怪人 ㉖ 怪鳥 ㉗ 怪獣
- ㉘ 頼政の平家打倒に呼応した木曾義仲は倶利伽羅峠で火牛を使った奇襲作戦で効を奏した。その倶利伽羅峠とはどの辺りか
- ㉙ 石川県 ㉚ 富山県 ㉛ 新潟県
- ㉜ 頼朝拳兵し源平は大きな川を挟んで決戦の時平氏は鳥の羽音に驚き敗退した。その川の名は
- ㉝ 大井川 ㉞ 天竜川 ㉟ 富士川
- ㊱ 清盛死因の病名はこの世の業病といわれる、その病名は
- ㊲ 胃がん ㊳ 肺結核 ㊴ 熱病
- ㊵ 宇治川先陣で佐々木、梶原の乗った名馬

「琵琶で聴く平家物語」

各流派琵琶演奏大会

京都琵琶協会主催の首記演奏会が涼風吹きそめた九月十日(日)京都河原町広小路の府立文化芸術会館で開かれた。前々日から前日にかけて四国中国地方を始め各地にもたらした大雨のため当日の天候が案じられたが、一夜明けると嘘のように良い天気になり爽やかな初秋の気配の中を、開会一時間も前から数人の聴客が詰めかけて前景気は上々。十一時になるのを待って予定通り開幕したが、その頃には聴衆が続々押かけ受付係は息つく間もなく整理に忙殺されて嬉しい悲鳴を挙げ、各門下生の前奏四曲が終る時分には二組の外人や

多数の若い男女を交えた五百の椅子席は殆ど空席なく満員の盛況を呈した。広い舞台には金屏風を背に赤毛氈を敷きつめた一段高い演台をしつらえ、右手に日本芸能顕彰会から協会に贈られた三十センチの大金盃と賞状、左手には美事な盛花と紫地に白く染め抜いた「京都琵琶協会」の会旗が、上下左右からの照明灯で燦然たる光彩を放ち、照明を薄暗くした聴客席と対照的で、一曲ごとに幕を下ろして次ぎの演者と曲目をアナウンスし、紋付袴或は演奏衣に威儀を正した演者が次ぎ次ぎと演台に上って平家物語にちなんだ曲を熟演し、聴客はその昔を偲んで文字通り「平家物語ブーム」に酔いしれ、恍惚境に浸って六時の終演迄熱心に聴き入っていた。又当日は薩摩琵琶四明会や愛媛県琵琶連盟の名手、筑前琵琶の第一人者などの来賓演奏により錦上花を飾ることが出来たのは幸いであつた。

終演後、席を鳥丸蛤御門の私学会館に移して慰勞懇親の宴を張り、今日の成功を祝して乾盃、目出度閉会した。

(出演者と曲目) 合奏あゝ山仙平さん・門琵琶 山本、矢吹、平井、敦盛塚、永井美江、小松の操、山本、衣川、山崎旭榮、同(下)相良旭輝、未練西行、戸倉旭輝代旭登、常盤御前、古谷寛水、文覚荒行、美登里進水、大西旭明、屋島の誉、阪本一峰、五条橋、田中鶴水、小松の操、伊吹正陽、壇の浦、伊東旭山、寂光院、平井春嶺、大物の浦、若宮

旭登 宇治川先陣 木村維水 粟津の露 矢吹華水 横笛 植村寛水 仏御前 梅原旭壽 千手の前 四明会 山木岳盛 安宅 松山白石 旭優 敦盛 松山佐藤晃 小督 四明会 岡部錦蝶 都落ち 橋山崎旭萃

一水会神戸支部

七月二十三日神戸支部の「ゆかた会」では恒例のゆかた会を西宮市の松下ホールで開催した。折悪く九号台風の接近で天候を心配したが幸い大したこともなく予定された左記二十四名は酷暑を冒して全員参加、午後一時半から各自好みの曲を、又詩吟を力一ぱい研修して夕六時一応終了、続いて小宴に移り歓談を尽して八時半無事散会した。

(参加者) 川上吟糸、遠藤治子、溝脇光子、吉田吟葉、千藤吟泉、尾崎吟竜、場吟永、田村吟魁、山崎蓮根、竹内優水、井上碧水、崎司陽、杉本キクエ、篠田昌子、宮崎伝、塚本綾水、田中善苑、杭東旋水、近藤登水、森中志水、広瀬綴水、三浦蓮水、松野紫雲、蔵本司水夫妻。

当日研修された琵琶曲「会津白虎隊」外十七曲、詩吟「富士山」外十五題。

薩摩琵琶四明会 残暑と公害の街をのが高野山一泊会 れて八月二十六、七の両日霊場高野山に恒例の一泊会開催。二十六日

午後一時大阪なんば発急行で一行三十一人(四明会十一、正絃会二、京都琵琶協会四、浜松小野鶴門下六、京都平井春嶺門下三、四明会員の家族五)は三時半を降る初秋の雨中を宿坊成福院に着。木の香も新しく青畳の匂も心地良い新築の大広間で少憩、雨の霽れ間に本山金剛峰寺に参詣し宝物等を拝観して夕刻帰坊し入浴、浴衣に着換えて精進料理に舌鼓を打った後弾奏を抽籤順に開始。物狂 山田薫雲、元寇 小野鶴彦、乃木將軍 木村維水、老蘇の森 藤崎天光、錦の御旗 山本嶺舟、薄陽江 岡部錦蝶、吉野山懐古 染谷晃岳、義士討入 有馬南城、五条橋 矢吹華水、夢 伊吹正陽、以第一節終了。この弾奏を聴かんものと他の部屋から多くの人が参集し、幽玄なる琵琶の妙音に恍惚となっていた。十時就寝。

翌二十七日五時半起床。前日の小雨はすっかり霽れ上り、初秋の太陽は燦然と輝いているが気温は低く長袖を着込んで本堂に集合し朝の勤業に参加の後、滑められた気分を霊地参拝に出発、琵琶人に特に関係の深い刈萱堂や熊谷寺に参り、一の橋を過ぎ参道両側更にその奥に拜する諸大名の墓石、樹齢千年の高野杉は亭々と立ち並び香煙は絨々として煙る、幽邃ここに極まって冷気はあつた襟を正さしめる。「石童丸」歌中の無明の橋はこれかと自問しつつ渡れば、刈萱と石童丸の出会いはこの辺りなどと思われ、これらの人々も遂には土に還りわれらもやがて永き眠りにつくな

水藤五郎氏

NHKオーディション合格放送の次代を担う新人邦楽(清元、小唄、端唄、琴、尺八、琵琶)の放送が九月二日午後一時から二時までNHK第二ラヂオで行われ琵琶は水藤五郎氏が修善寺物語「桂」を演奏して戦後兎角低調の琵琶界のために大いに気を吐いた。

京都琵琶協会

残暑きびしい九月二日九月定例茶話(土)午後一時から会員平井春嶺氏宅の冷房のよく利いた二階座敷で開催。伊吹正陽、田中鶴水、梅原旭壽、矢吹華水、安住旭康、牧南水、古谷寛水、木村維水、植村寛水各会員の外福井吉野洲水氏も来遊せられ折からNHKラヂオ放送の水藤五郎氏の琵琶演奏を鑑賞したあと九月十日協会演奏大